

第22回教育委員会（臨）

開会日時 平成28年 11月 28日（月） 午前 10時30分
閉会日時 午前 11時25分
開会場所 中台中学校多目的ホール

出席者

教 育 長	中 川 修 一
委 員	高 野 佐 紀 子
委 員	青 木 義 男
委 員	松 澤 智 昭

出席事務局職員

事務局次長	寺 西 幸 雄	地域教育力担当部長	松 田 玲 子
教育総務課長	木 曾 博	学 務 課 長	三 浦 康 之
生涯学習課長	浅 賀 俊 之	地域教育力推進課長	石 橋 千 広
指 導 室 長	栗 原 健	教育支援センター所長	新 井 陽 子
新しい学校づくり課長	佐 藤 隆 行	学校配置調整担当課長	水 野 博 史
施設整備担当副参事	荒 張 寿 典	中央図書館長	荒 井 和 子

署名委員

教育長

委 員

午前 10時 30分 開会

教 育 長 皆様、おはようございます。本日は3名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立いたしました。

ただいまから、平成28年第22回の教育委員会（臨時会）を開催いたします。今回は、ここ中台中学校の「多目的ホール」をお借りして、「身近な教育委員会」として会議を開催いたします。

板橋区教育委員会では、区民の皆様に対して開かれた教育行政を推進する観点から、「区民が身近に感じる教育委員会の実現」に向けて、様々な取組を行っているところでございます。

本日は、その取組の一環として、地域の皆様や保護者、学校の関係者が傍聴しやすい学校で教育委員会の会議を開催することにいたしました。

教育委員会とは、法律に基づき、行政委員会の1つとして、区長から独立した執行機関として設置され、教育長と教育委員4名で構成されています。

大変申し遅れましたが、私は教育長の中川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、委員の紹介をいたします。

高野教育長職務代理者でございます。

高 野 委 員 高野です。よろしくお願いいたします。

教 育 長 青木委員でございます。

青 木 委 員 おはようございます。よろしくお願いいたします。

教 育 長 松澤委員でございます。

松 澤 委 員 松澤です。よろしくお願い致します。

教 育 長 なお、上野委員からは、ご欠席の連絡が入っております。

以上のメンバーで、定期的に会議を開催し、教育行政の運営に関する基本的な方針や重要な事項について審議決定しており、本日の会議もこれに当たります。

さて、教育委員会では、学校その他の教育機関の管理、学校の組織編制、教育課程、教科書その他の教材の取り扱い、教育職員の身分取り扱い、さらに社会教育、その他教育、学術及び文化に関する事務を行っております。

本日の会議では、これらにかかわる事案のうち、特に保護者・地域の皆さんに関心の高い学力に焦点を絞って、文部科学省が毎年4月に全国全ての公立小・中学校で実施しております「全国学力・学習状況調査結果から見る家庭と学校の役割」をテーマに、講演、意見交換を行っていきたく思っております。

それでは、本日の会議に出席する教育委員会事務局の職員を紹介いたします。

寺西次長、松田地域教育力担当部長、木曾教育総務課長、三浦学務課長、浅賀

生涯学習課長、石橋地域教育力推進課長、栗原指導室長、新井教育支援センター所長、佐藤新しい学校づくり課長、水野学校配置調整担当課長、荒張施設整備担当副参事、荒井中央図書館長、以上12名でございます。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により松澤委員にお願いいたします。

本日の委員会は、24名から傍聴申し出がなされており、会議規則第30条により許可しましたので、お知らせいたします。

それでは、早速ですが、栗原指導室長から、「全国学力・学習状況調査結果から見る家庭と学校の役割」をテーマに、講演をお願いいたします。

指導室長 皆様、おはようございます。指導室長の栗原でございます。

今日は、この後の教育委員の皆様の意見交換ということでお話しをさせていただきますが、その後半に、保護者の皆様、また、ご参加いただいた皆様との意見交換ということもありますので、今日は傍聴していただいている皆様にも情報をお伝えするという形で、委員の皆様には繰り返しのお話の部分もあるかもしれませんが、今日、ご参会の皆様にお伝えできればということでお話をさせていただきます。

それでは、冒頭、資料の訂正がございます。申し訳ございません。

スライド番号26、全国と比較して正答率が低かった設問例、「中学校数学B」となっていますけれども、これは「A」が正しいです。

スライド番号26、「中学校数学A」に、恐縮ですが訂正をお願いします。

昨年度、全国学力・学習状況調査の結果が板橋区は非常に悪かったのではないかということ言われていました。実際、全国平均正答率というものと比べると、板橋区平均正答率はそれよりも低い傾向に昨年度はありました。

今年度は全国平均正答率を多くは超えてきました。まだ、若干、届いてない部分もあるのですが、学力そのものは全国平均と比べるとかなり全国に追いついてきた、あるいは超えてきた、平均するとそのような状況になります。

ただ、学力というのはここだけで見られるものではないのですが、1つの指標にはなるかと思えます。

今日はテーマとして家庭と学校との役割ということもありますので、ただ単に国語、数学の点数が上下したということだけではなくて、特に児童・生徒、子どもたちの質問紙という中で、どんな生活習慣を身につけているのか、学習習慣を身につけているのかということも簡単にご紹介させていただきます。

そういった視点からも、学校ももっともっとやるべきこともありますし、既にかなり頑張っているところもあります。

ぜひ、ご家庭でも、この学校での状況や、まさに今、学力として問われているものは何なのだろうかということを考えていただきながらお話を聞いていただければと思います。

残り15分程度ですので、資料の説明については大雑把な部分もあるかと思いますが、ご了承ください。

全国の学力調査の目的は様々あるのですけれども、大事なのは、後半の部分かなど、今日は特にです。

国がやること、そして板橋区がやることとありますけれども、全ての学校の、一人一人の児童・生徒、小学校6年生と中学校3年生というように全員を調査対象にしているということは、まず、(3)のところですが、学校は、当然、一人一人の子どもたちの状況を把握し、その一人一人の子どもたちにどういう手立てを講じたらいいかということを考えなければいけないということですね。

あわせて、この4番の部分です。

子どもたち自身も自分の状況をよく自覚する。さらには保護者の方も、自分のお子さんが今どんな状況にあるのか。これは国語、算数、数学だけじゃないです。その意識調査の部分も一緒に考えていただきながら、例えばスマホの時間、全国平均と比べてどうかというようなことも、1つ、見直すデータにさせていただければと考えています。

調査自体は4月に行われましたので、小5まで、そして、中2の学年までの学習状況がどのような状態だったのかというのが中心に調査されていることとなります。

国語、算数、数学ということで、A問題というのが基本的な知識に関すること、そして、B問題は活用というものになります。今日は時間の都合で取り扱いませんけれども、ぜひ、ここは大人も、特にB問題というものを実際に解いてみると、今、求められている学力、さらには、今、大学の入試が変わろうとしています、どんどん進んでいます、この大学の入試もこういうふうに変っていくのではないかなということのヒントになるのではないかと思います。

全体的な板橋の概況ですけれども、小学校は、国語、A問題、B問題、算数、A問題、B問題とも全国平均を上回りました。

そして、中学校。国語については、A、B問題とも平均正答率が国を上回ってきました。数学A、Bはまだ国の平均まで達していないのですけれども、大分上昇しています。全国との差が小さくなってきているという状況があります。

さらに今回見えてきたのは、「無回答率」という回答しない子どもたちの率が下がっています。そして、全体の設問数、例えば18問とか二十数問とか、それぞれ問題があるのでありますが、それに対して、全く回答しないゼロ問、1問も答えない子たちの数、率も下がっている。とにかく何とか問題を解こうという、そういう意欲、意思が高まってきているという傾向があります。

標準偏差というのはちらばり具合ですけれども、このちらばり具合が全国と似たような形になってきていますので、学力がなかなか身につかない子、そしてすごく高い子の幅が全国と同じような状況になってきているということがあります。

この後、グラフが出てきますけれども、昨年度はやや中央値、この山の一番高いところが全国平均よりも左にずれる傾向がありました。これの棒状のものが板橋になります。棒状のものが板橋区で、折れ線の部分ですが、三角が東京都、そしてダイヤ型のものが全国です。かなりどの部分を見ても、全国と同じような形になってきている。これが今年度の大きな特徴です。

全国の平均正答率を100としたときという資料も載せました。

左は中央欄の線なのですけれども、この折れ線のグラフを見ていただくと、昨年度、落ち込み傾向にあったのですけれども、小学校国語Aも、若干、下がっています。しかし、小学校国語BもまさにV字回復状態です。

小学校の算数においても、上昇傾向にあります。

中学校も、昨年度より上昇している傾向が見られます。数学についても同じです。全国平均よりややまだ下回っていますけれども、上昇傾向にあるということで、来年度も非常に楽しみな状況です。

例えばゼロ問の児童数、生徒数というのを見てみますと、小学校国語B、全部で10問ぐらいある問題ですけれども、去年は159人の子はゼロでした。全然答えなかった子ですけれども、今年度は80人に減少しています。

中学校。例えば数学B、ゼロ問が120人いました。4.0%。それが今年度は79人に減少してきています。何とか1問でも答えようという、そういった生徒が増えてきているということが言えると思います。

では、学校は何を変えてきたらこう伸びてきたのか。例えば授業を変えようということで、今年度、全校で取り組んでいます、板橋区授業スタンダードという授業の流れ、特に、常に子どもに思考させる。思考させるために「ねらい」を明確にしたり、学んだことを振り返ったり、そういった学習を取り入れる。思考させるために、例えばICT機器を活用する。そういった授業を今年度は全校で積極的に、徹底していくということをやっています。

例えばこういう問題がありますけれども、これは、今日は時間の都合で取り扱いませんが、ぜひ、大人も解いていただきたいと思います。

何が試されているのかという部分です。

正答率の低い問題を見てみますと、共通しているのは、長い文章があったときに、それを読み取るとか、自分の考えを書くということは、国語、算数、数学とも共通して課題として挙げられています。ただ、これは学校だけではなかなか解決しない、定着しない部分があります。

今回、意識調査で見えてきたのは、家庭での学習の習慣というものが大きなキーワードとして見えてきました。

例えば質問紙から見る課題としては、テレビやビデオを見る時間、ゲームをする時間、スマホなどをさわるとか使用する時間、家庭学習の時間そのものとか、読書のお話、こういったものが課題として見えてきています。

例えば中学生。テレビやビデオを視聴する時間ですけれども、数字が1番の左側になります。左、この部分を上と照らし合わせていただければと思うのですけれども、例えば4時間以上見ている子が10%いると答えています。

本当に、一日でどれだけの時間をテレビ、ビデオなりに費やしているのか。あるいはゲーム、ゲームも左から2つ目が3時間以上です。3時間以上の子たちが15%ぐらい、20%近くいる。さらには2時間以上に区切ってみても、板橋区の子は3割合の子が2時間以上をゲームしている。これは小学生です。

中学生はどうか。さらに増えていきます。2時間以上、3時間より少ない。ゲ

ームをする時間が、これが3割を超えてきているような状況です。

スマートフォン。これは中学生です。

この一番右側は、持っていないという回答をしている子です。全国と比べると、持っていない子は少ない。多くの子が持っているという状況です。

じゃあ、どれぐらい使用しているのか。

4時間以上も10%を超えています。1日の数時間スマホを使用している、そういう実態が浮かび上がってきています。

読書については、好きですかという問いについては、小学生から中学生を見ると、やはり好きですかというのはなかなか少なくなってきていますし、特に中学生は読書の時間がかなり短くなっている状況にあります。

ただ、嬉しいことに、学校生活はどうなのだろうという問いに対しては、多くの子どもたちは、全国平均と同じように、学校に満足している。ここは各学校がやはり工夫した授業であったり、あるいは学校行事であったり、子どもたちを盛り上げているのではないかなということが見てとれます。特に中学校は、全国平均よりも当てはまると答えている生徒が多い傾向にあります。

そこで、改めて、家庭学習の時間はどうか。

ゲームやスマホの時間にかかなり取られている状況がありますけれども、家庭学習の時間、これなどはやはり確保していく必要があるのではないかなということが見えてきました。

次の資料は学習塾の状況という、中学校ですけれども、一番左側が学習塾に通っていない子ということです。全国平均を見てみますと、やはり塾になかなか通いづらい生活環境にある地区もあるのかなと思います。

板橋区は、大体、塾に通っていない子は3割ぐらいです。東京都平均と同じぐらいです。そのほかの子、7割ぐらいの子は何らかの学習塾に、またはそれに準ずるもので勉強しているという数字が出てきます。

学習塾も含めての学習時間というのがこの調査項目にありますけれども、例えば一番左が3時間以上です。これは全国と比べると、板橋区のお子さんは割合が少し多いです。学習塾の影響が考えられます。

ただ、やはりこの右側を見ていただくと、例えば30分から1時間とか、あるいはもっと少ない、30分より少ないというお子さんたちもやはりいるということですね。ほとんど家では勉強していないお子さんたちもいるという状況があります。ここで、やはりスマホとかゲームで数時間費やしているお子さんがどこに当てはまっているのかということで、ここは細かく分析していく必要があるかとは思いますが。

では、学校は、どうなんだと。家庭学習についての働きかけはどうですか。

小学校では働きかけはしているのですがけれども、実は学習方法という意味では、もう少し頑張れるかなというのも学校に聞いた質問紙から見てとれます。

中学校、生徒に家庭での学習方法を教えたか。

全国平均と比べると、よく行ったと学校として答えている数がかかなり少ない状況にあります。ここは本区の課題かなと思います。

時間を確保する。スマホやゲームをたくさんやっている生徒がいるのですけれども、家庭でこんな学習ができるのではないですかということ、ここはもう少し学校としてもできることかなと考えています。

そこで、今、小・中学校の校長会を中心に、指導室とも一緒に家庭学習の手引きを作成していこうか、もう既に配付している学校もあるのですけれども、何か、こういう家庭学習の手引きというものが、ご家庭または児童・生徒、子どもたちにも参考になるのではないかなと考えて、今、作成を検討しているところです。

もう少しだけこの調査から見えてきたこと。これはよく分かることだと思うのですけれども、規範意識と学力ということで、学校での決まりを守っていないと答えているお子さんがいるんですね。そういったお子さんは学力については平均正答率から見るとかなり低い傾向が見える。そういった傾向もありますので、やはり規範意識はしっかり持たせなくてはいけない。

このことも学校はかなり指導しています。ただ、もちろんご家庭の力と連携して、一緒にやっていく必要がある部分かなと思います。

改めてですけれども、学校は、今年度、特に「授業革新」という言葉を使い、全ての学校で板橋区授業スタンダードにのっとった授業を全員がやっていきましょう、徹底していきましょうということで授業を変えていきます。

ここに記載のとおりのことですけれども、ここもまだまだ学校を訪問すると十分徹底できてない部分があるように思います。ここをさらに学校としては徹底していきたい。これは教育委員会としても指導し、助言していきたいところであります。

こういった意識調査を見ても、例えば「ねらいの提示」などというところでは、大分、子どもたちにとっても、やっているなというところが見えてきます。

ただ、中学生、例えば全国平均と比べて、当てはまるというのは若干低い傾向がありますので、例えばねらいの提示、来年度の調査はもうこの当てはまるというのが9割ぐらいいはこっちに来るように、そういう授業を各学校でやってほしいなと期待しています。

I C T機器が入りました。特に算数、数学についてはデジタル教科書を導入しています。算数だけに絞って見たところ、ここですね、去年、小学校算数のデジタル教科書が入りましたので、全国と比べても、思いっきり、すごくたくさん使っているような、週一回以上変わらず使っているという、そういったデータが出ています。

一方で、中学校。まだまだです。もちろんこれは4月の調査ですから、来年度は確実に、週一回以上、このI C T機器を使う。特にデジタル教科書が全校にある、数学については。もう全校で必ず使うという数字にはなってくるかと思えます。

そこで、改めて学力調査の目的ですけれども、国が、板橋区がやることもたくさんあるのですけれども、ぜひ、この資料でいう3番、4番のところ、一人一人全ての子どもたちへの調査ですので、学校も一人一人の状況を把握し、そしてご

家庭でも、お子さんの状況を把握していただいて、一緒に課題解決に向けて考えていただければと思います。

例えば、ゲーム、または読書、そして計画的に勉強しているかどうか。今回の調査結果には、学力と大きく影響してくるところだということに見えてきます。

学校では、授業革新に向けて一層様々な取り組みを進めていく。そして、ご家庭では、お子さんの状況をよく把握していただいて、そして、学校への課題もお伝えしていただき、そして家庭でも一緒に色々考えていただきたいと思います。

特に小学校のお子さんは、家庭学習の推進のところでは、一緒にやるというのも1つの手かなと思いますけれども、中学生は、当然、もうなかなか保護者の方と一緒に勉強するというのは難しいかと思しますので、それぞれの発達段階に合わせて工夫して、協力していただければと思います。

この最後に挙げた板橋区の教育ビジョン、ここは目指す姿、子どもたちがいずれこの板橋区、そして日本を背負っていく大人となったときに、この目指す姿、ここを、学校ももちろんですけども、全ての板橋区民が共有していただいて、保護者の方はもちろん、地域の方も一緒に子どもを育てていく、一緒に成長させていくんだ、そういう思いで見いただければと思います。

私からのご説明は以上でございます。

教 育 長 指導室長、ありがとうございました。

それでは、ただいまの講演を受けまして、教育委員の皆様からご意見を伺ってまいりたいと思っております。

いかがでしょうか。

では、高野委員、お願いします。

高 野 委 員 今の指導室長の説明で、昨年から、結果の方がいい傾向に出ているというようなお話を伺いました。

説明の中でももちろん何度も繰り返されておりましたけれども、まず、そういう結果が出たというのは、全国の学力調査がなぜ行われているのか、また、どういう目的で行われているのか、まず、その理解を各学校でしっかりと共有していただいたからというのは大きかったと思います。

その上で、校長会を中心にして、全部の小学校・中学校を挙げて色々な取り組みをしていただいたことが結果につながっているのではないかなと感じました。

調査で数字的によいものを残すことだけが目的ではないと思うんですね。今後につながる生活習慣ですとか、学習習慣を改めていくことが大きな目的になると思いますので、今後も今取り組んでいることをしっかりと続けていくことが大事かなと思いました。

また、家庭で、また、子どもたち本人がどういうふうにかこれを受けとめていったのかということもとても大切なことだと思います。

質問紙の中での生活習慣、学習習慣についての数字を、私は子どもたちにもっと自分のこととして捉えてほしいなと思いました。

自分の身の回りと比較して安心してしまわず、自分の生活習慣で改めなければいけないところがたくさんあるのだというところを子どもたち自身が自覚するきっかけになってくれるといいなと思いました。

正答率の低い設問について、特に国語では基本的な言語に関する知識、理解、また算数・数学では問題内容の正確な理解というようなところは正答率が低かったようですけれども、私自身、実際にこの問題を解いてみました。

B問題はもちろんですが、A問題を解くときにも、問題の設問をしっかり読めないと解いていけない問題が多くありました。子どもたちの中には、問題文を読む時点で諦めてしまっている子もいるのかなというような印象を持ちました。

ですから、ふだんから文章に慣れること、読書とか、新聞など、文字に親しむ習慣というものがとても大切だなと思いました。

あと、ICTの活用について。小学校ではICTの活用が大分進んで、69%、大変いい数字が出ていたのですけれども、中学校の方でICTを週一回以上使ったというのが全くないという回答が60.9%あったというのは、少し残念だなと思いました。今年度は、中学校でも電子黒板が各学校に配置されましたので、ぜひ使っていただきたいなと思います。

学校公開で色々な授業を拝見している中で、小学校の中ではもう既に設置されておりますけれども、その中でも電子黒板に物が張ってあるというようなこと、本当にたまにですけれども見かけることがあります。

やはり、いつでも使えるように、先生方もお忙しいとは思うのですけれども、ぜひ利用していただきたいなと思いました。

あとは、今回の調査ですと、今日の説明資料の中にはなかったのですが、質問紙の中に、子どもたちが地域の行事とどうかかわっていくかというような点がありました。

先日も、この中台中学校の合唱コンクールや学習発表会を拝見して、その中で、地域のジュニアリーダーを経験している子や、あと、生徒会で活躍しているお子さん、そういう子どもたちが中心になって色々な部分の進行や計画などを進めている姿を見ました。

やはり学校での生活の中に、ご家庭での取り組みも大切ですが、その中に、ぜひ、地域での行事に参加するというようなことをご家庭でも推奨していただいて、学校と家庭だけでなく、地域の中にもそういった子どもたちの力を伸ばしていけるようなことができればいいなと思いました。

あとは、今回の説明を聞いていただいたように、学校で、今、板橋区授業スタンダードに取り組んでおります。子どもたちのノートを私もよく見るのですけれども、そこにはしっかりと今日の授業のねらいを書いて、そして最後に振り返りを書いております。

ですから、小学生のお母様などは、ぜひ、学校から子どもたちが帰ってきたときに、そのノートをご覧になっていただいて、今日はこんな勉強をしたんだな、こんなことが分かるようになったんだなというような声かけをしていただくのも、家庭と学校が協力していける1つの手立てかなと思いました。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、松澤委員、よろしいですか。

松 澤 委 員 学力調査ということで、今日の課題ですけれども、私を感じるの、昨年、学力調査と学力を向上するという目標を立てて、教育委員会の方でも各学校にそういった話をしていって、大体、1年たちまして、思ったより早く効果が出ているなど非常に感じております。

 なかなか、やはり数字として上がってくるというのは時間がかかるものだと私は思っているのですが、板橋区の方ではかなり成果が数字として表れているのではないかと感じております。

 私個人の意見もあるのですが、公的機関の役割ということで私は少し考えたのですが、義務と権利というものがあると思うのですが、子どもたち自身が最低限の教育を受けるということ、そして子どもたち自身も勉強しなければいけないのだという、勉強するという義務があるんだよということを総合的に分かっていかなければいけないのではないかなと思っております。

 何が大事かという、社会に出た後に子どもたち自身が自分たちで何をしていくのか、そしてそれが役立っていくのかということを考えて上で、色々なお話をご家庭でもしていければすごくいいのかなと思っております。

 私が考えるのは、昨年と今年ということで、短いスパンでの比較がすごく大事かなと考えております。

 すごく成績がいいところにいる方は大丈夫だとは思いますが、余り成績がよくない方がすごく上を目指すということは非常に大変で、困難だと思うのです。そういった部分で、昨日より今日の方が1つでも問題ができるということの積み重ね、そういったことが非常に大切になってくるのではないかなと思います。

 そして、それを踏まえて、先ほども室長がおっしゃっていた授業を変えるということで、授業に興味をもって子どもたち一人ずつが授業を真剣に受けている姿というのができている学校も、できているクラスもあるし、できていないクラスもあると思うのですが、そういったことを、毎日、日々、繰り返していくことという、その繰り返しのことで学力というものもついてくるのではないかなと思います。

 あと、もう1点。ミスや、できなかったときのアプローチというのは非常に大切なのではないかなと思うのですが、やはりチャレンジしていく、難しいけれども、もうできないんだという、私も子どもがいるのですが、やはり諦めてしまうときに、どうやってその子のやる気を出して、まだいけるといふふうにもっていくかというのは非常に難しく、それは日ごろチャレンジする、私はできないというときにチャレンジしていけるような癖をつけるということが非常に大切なのではないかなと思っております。

 そのときに必要なのは、できるということの積み重ねによる自信、子どもたち自身が、「ああ、できた」ということを自信に変えていけると感じておりますの

で、そういったところで、最後に板橋区のビジョンでも言っている自信や自尊心ということが非常に大事になってくるのではないかなと思います。

あと、テレビ、ゲーム、スマホという話題が出たのですが、私もテレビもゲームもスマホもやっておりますが、アナログというか、うちはスマホもゲームも子どもたちはないのですが、テレビというのは読書に当てはまるかなと思います。

ゲームというのは、遊び。電子ゲームではない遊び。カードゲームですとか、そういうのに当てはまるのかなと思っています。

スマホというのは、やはりコミュニケーション。会話というふうに、会って会話するというふうに考えておりました、先ほど高野委員の方からも出たのですが、国語の読解力などは、読書であったり、会話であったり、そういったものが非常に大事になってくるのかなと思います。数学の問題を解くときにも、問題を理解する能力というのは非常に必要になってくると感じておりました、そういったものも、対面の遊びであったり、コミュニケーション、たくさんの人との会話であったり、そういったことですごく学んでいけるのではないかなと私自身では思っております。

子ども自身、一人一人が色々な能力があると信じておりますので、勉強ができる子もいれば、すぐにできない子もいると思います。それは成長過程で色々あるとは思いますが、昨日と今日を比べていただいて、ご家庭で励ましていただいでいくということですね。

そういったことで、その毎日の少しずつの積み重ねによって、大人になったときに未来の自分をつくっていくということで、そういったことを説明できるような環境であれば、未来に向かって、では、ここを、今これをやる、今はこれをやるというふうになっていけるのではないかと感じております。

こういった学力調査をしたときに非常に感じるのは、それをできてもできなくても、みんなでオープンに話し合っ、今回できなかったけれども、次は頑張ろう、今回、できたけれども、次もまた元に戻ってはいけないのでということを家族で、学校、クラスで、そういうところと話し合える環境をまずつくっていくことが非常に大切なのではないかなと私自身は感じました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。先ほど出たのですけれども、A問題、B問題、本当に昔からの読み書き計算と言われている基礎的なこと、これは非常に重要なのですけれども、それと同時に、要はこれから子どもたちがどういう力をつけていかななくてはいけないのかということですので、子どもたちはこれから10年、20年後に社会に出て活躍していくわけですので、そのときに生かせる力というものをやはり私たちは意識しなくてはいけないのですが、時々、学校というのは目の前の子どもたちを何とかしなくてはいけないということで、その10年後、20年後の社会を意識した教育というものについての意識がどうなっているのか。

そして、私も3人の子どもの親であるのですけれども、親は、例えば20年前

に自分が受けた教育を、絶対視する。ということは過去20年と未来20年、40年のタイムラグが出るというところに、私自身は、自分が親として、今、冷静に考えたときに、教育のあり方、あるいは学力のあり方というところでもう少し考えを深めていかななくてはけないのかなということを考えているのですが、青木委員には、ぜひ、これから子どもたちの力、どういう力が求められるかを含めたところも含めてお話をいただければと思います。

青木委員 私は、今、仕事が大学の教員ということで、大学生を日ごろから見るという立場にあります。そういった意味でいきますと、まず、今日ご紹介のあった学力調査の結果というのは、あくまでも正解のみが評価の指標になっています。正解のみです。ということは、途中であったケアレスミスですとか、解く過程の努力というのは点に全く入っていません。

答が出ているか、出ていないか、合っているか、合っていないかの指標ですので、やはり一人一人のお子さんの努力というところが見えていません。あくまでも合っているか、合っていないかです。

先ほど指導室長からもありましたが、その部分をやはり家庭で見えさせる必要があるのかなというのが1つあります。見てあげて、どこまで考えたかということが大事です。

大学に行きますと、答の解き方、出し方は多様です。別解と呼ばれる幾つもの解き方があって、最終的に答を導き出せばいいのです。だとすると、先生に習った、塾で習った、この答えでなければいけないということはありません。

その多様性をぜひ認めていただいて、そうでないと色々な、柔軟な発想で、まさにアクティブ・ラーニングをしていくためには、頭が完全に固まってしまうような、こういう解き方でなければいけないという話になってきてしまって、応用、発想、創造ができなくなります。これは、ぜひ、家庭では抑制していただきたいなと思います。学力調査、途中過程というのが私は本当に大事だと思っています。

今、大学でも、テストの点を採点するのに、途中点という概念を多分に入れてあります。この人が、隣の子の答案をのぞき見たとか、前の晩に過去問や何かをひたすらやって解き方だけ記憶したのかではなくて、自分で考えたかどうかの方が大事なのです。

ですから、そこをやはり伸ばしてあげられるようなことが、第一だと思います。それを、ぜひ、お子様には言って聞かせて、努力していただきたいなと思っております。

それで、非常に象徴的なお話が昨日あったので、皆さんにご紹介したいのですが、けれども、ネットの情報で、脳科学者の茂木健一郎さんが、昨日、数学の問題についてコメントを出されていたのをご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。

3. $9 + 5$. 1は. 3. $9 + 5$. 1の答. 9ですね。

「9」と書くのか、「9. 0」と書くのかという話です。

「9. 0」と書いた人が減点されたという話で、茂木先生が非常に怒っている、これはおかしいという話をされている。そのとおりだと思ったのです。私も大賛

成です。

なぜか。これはこの数学を使っていて、世の中にまきに出たときに、世の中で、この数字の計算の仕方の概念が非常に大事になってくるからです。

これを9という形で、9でなければいけないと思ひ込んだ人たち、それは大学へ行って、特に理系、理系ともう言いたくないですが、理系でも文系でも、この計算が「9.0」ときちんとして、私から言わせると、きちんとして子どもだと思っています。

なぜならば、先の計算が3.9と5.1ですから、二桁ですね。有効数字の概念です。この有効数字の概念を一桁にまとめるというのは、社会に出てからおかしなことが起こります。

1つだけ例を挙げさせてください。こういう話をぜひ家庭でお子様にしていただきたいのですが、物をつくるという業種につく人はこれからたくさん出てくると思います。なぜなら、自動化されて、色々な形で物をつくる場所にもロボットが、自動機械が入り込んできて、そういうものの設計をする人が多くなっているからです。

例えばこのペットボトルを設計するとき、このキャップの寸法を9.0と設計図に書くのか、9と書くのか。それは工場の人たちがこれを、ペットボトルの金型というのをつくる人たちがそれを見たときに、9だと誤差は10%あってもいいのだと考えるのです。9.0と書いてあると、9.0に対してのその一桁下に10%の誤差があってもいいという形です。

誤差の概念が10分の1違います。そうすると、何が起こりますか。緩いキャップが出てきてしまうのですよ。緩いキャップが出てきて、それを皆さんがそのキャップをつけたペットボトルを開けて、締めて、バッグの中に入れて、お茶がドボドボこぼれたらどう思いますか、という話なのです、単純に。そういうところにつながってってしまうという話なのです。

これは大学生に直接教えてもなかなか理解してもらえない場合があります。頭が固まっているからです。中学校・高校の先生にこう教わりましたと言っている子がいるからなのです。これは大変問題だと思います。

やはり小学校、初等教育の段階から、世の中に出て使う数字というのはどうやって生かされるのだという教え方をすれば、数学の大事さも伝わります。時々いらっしゃるのですけれども、子どもに、「数学なんかやったって、やらなくたって全然使わないよ」ということをおっしゃる親御さんが、もしかしたらいらっしゃるかもしれない、ここにはいらっしゃらないと思うのですけれども。

そういうことは、これからの時代、全くありません。どんなところでも、論理的な思考の中で、数学で物を考える、経済の中でも統計で物を考えて、株価の変動ですとか、将来の予測だとかが必要になってきます。

むしろ統計学は、今、経済学部に行ったところで大事だと言われていて、そういうもののつながりが必要になっています。

アメリカでは、オバマ大統領がSTEMという、今、教育を進めています。

ご存じの方も多と思いますけれども、STEM、Science、S、Te

chnology、T、EngineeringのE、Mathematics、数学のM、この4つをもらって「STEM教育」と言っております。

これを理系で強めることではないのです。文系でやりましょうという話なのです。

なぜならば、これからは論理的な思考で物を考え、創造し、人に説明するときも分かりやすく、論理的に説明しないと人は納得しませんよという話です。

特に新しく出てきたもの、便利なもの、中の仕組みが分からないものを分かりやすく説明するということがとても大事だからです。

この辺の考え方は、小学校や中学校の先生にその子の見方、考え方で一人一人個別に教える時間はありません。これを、ぜひ、お子さんの特質、考え方、行動形態を見ているご家庭の皆様が語り継がれて、例を出してお話をさせていただくと、恐らくお子さんは間違いなく変わってきます。

自分が社会に出て役立ちたい、世の中の役に立ちたいというお子さんは全員です、恐らく。10人いたら10人そう思っていると思う。そうしたら、そういうものに役立つんだよと言っただけであれば、お子さんは間違いなく進んで勉強するはずですよ。

そういう考え方を持っていてほしいし、もう1つは、今、米国の教育の話をしたんですが、少しだけ異なるのが欧州の話です。ドイツなどで進めているインダストリー4.0という新しい考え方があります。これは教育界分野にも波及していて、教育で何をやっているかということ、体験学習を大いに取り入れています。

ドイツというのは、昔、研究者と職業人、マイスターとエンジニアと呼ばれるものを完全に分けて教育をしていましたが、今は完全に合体しています。なぜなら、コンピューターで物が簡単につくれるようになってしまったからです。

ですから、つくる人たちがやはり物をつくる現場を知り、物をつくる体験をしなければいけないということで、これをもう小中学校からやるようになりました。体験の時間を非常に増やしています。

こういった形で、世界中が少しずつ、特に欧米の先進国が教育の中で文系と理系という概念をどんどん壊し始めて、新しい社会科学という視点で物を学ぶ、教える、これを小学生の段階から始めています。

ぜひ、皆さんもその辺のところを少しだけ意識していただくだけで構いません。ネットのニュースを見るだけでも構いません。そういった形で、分野とかという縦割りの考え方を少しずつ払拭していただきたい。20年前はたしかそれがありませんでした。私もそういう教育を受けました。でも、それは、やはりおかしいなと思っているのです。

それで、例えば算数だったら、少し持ってきているのですけれども、数学はこんなところで役に立つという、こんなものがあるのです。これが生きるための数学が書いてある本です。大事な数学のための本です。

私は尋常小学校と言われる昔の数学の本を見せてもらいました。この本の数学の内容は全て生きるための数学でした。これはこの計算の仕方を知っていないと

生きていけないというようなものです。こういうのをやはり学ぶという考え方で子どもたちの役に立つ、これは大事だと思えば必ず学んでくれるはずです。

そういう考え方を少しずつ学校と家庭でどんどん先に進めて、一人でも多くその気になってもらうことが私は本質のアクティブ・ラーニングだと思っていますので、少し長くなりましたが、思いの丈を伝えさせていただきました。

教 育 長 ありがとうございました。私の方からは、子どもたちを明るく、元気に、健やかに育てたいのは、これは保護者の皆様、そして地域の皆様、そして学校、校長を初めとした教員、さらには教育委員会みんなの願いだと思います。そこで大切になるのが、やはり情報の共有化というか、同じベクトルで進んでいくということだと思います。そのベクトルの方向性を持つための情報の共有、そこに今回の学力・学習状況調査のデータというのは、いわゆるエビデンスと言われている、学力にどう結びついているのかという科学的な論拠でもあるわけなので、先ほど高野委員もおっしゃっていただいたように、ぜひ、学校側が点数だけにこだわらず、どういう状況なのかということ、子どもにも、保護者にも、地域にも、そして教員も全部が共有して、では、どうするのかということ、子どもたちに考えさせたり、保護者と一緒に、では、こういうふう子どもたちを育てましょうというようなことをする、本当に、今、重要な時期なのかなと思っています。

どうも日本人はランキングが好きなので、秋田県とか、福井県のように、何か、いつもトップのところを見据えているのですけれども、それも大事でしょうけれども、今、板橋の子どもたち、そして、例えば中台中学校、あるいは中台小学校、さらには若木小学校の子どもたち、この地域で言えば、そういった子どもたちの現状を見て、どうしなくてはいけないのかということにやはり同じ共有意識を持って、ベクトルを1つにして子育てに当たるということが大事であるということ、今、意見をお聞きしながら感じたところでございます。

この後、ぜひ、今日いらしていただいた皆さんには、教育委員、それから事務局スタッフも入りますので、皆様方の思いもお伝えいただきながら、板橋の子どもたちのために、よりよい施策、あるいは教育の方向性が見えればなと思っています。

それでは、以上をもちまして、本日の教育委員会を終了いたします。

ありがとうございました。

午前 11時 25分 閉会